

## 2017 年度 生涯発達心理学 第 6 回授業のまとめ（解答）

ク ラ ス		学籍番号				
氏 名			講義日		講義回	第 6 回

第 6 講 幼児期の機能と発達

基本的生活習慣の獲得

基本的生活習慣は日々の生活習慣を強制的に教え込むのではなく、子どもが自ら進んでしようとするのが大切である。子どもたちが自分でしようとする（ ①意欲 ）を大切にすることで安心感と（ ②模倣の欲求 ）が生まれ、基本的生活習慣の獲得につながる。

ことばの獲得と発達

「ことば」には、「日常生活の用を足す（ ③伝達 ）の機能」、「人間関係を維持発展させる社交の機能」、「ことばそのものを楽しむ鑑賞の機能」そして「思考の（ ④道具 ）となって合理的判断を助ける機能」が備わっていると考えられる。

（ ⑤マザリーズ ）とは、大人が乳幼児に向けた、意識するしないにかかわらず自然と口をついて出る、声の調子が高くゆったりとしたリズムの話し方で、大人は、独特な誇張された表情、（ ⑥高いピッチ ）のゆっくりとした話し掛け、おおげさな頭や顔の動き、長いことじっと見つめる、体にさわるなどを無意識に行っている。

はじめての「ことば」が発生すると少しずつ語彙が増加する。この頃の「ことば」は（ ⑦一語文（一語発話） ）と呼ばれ、子どもは自分の要求や感情などを一語で表現するようになる。同じことばであっても状況や環境によって意味が異なり、身振りや表情を伴って多様な意味を表わしている。

知能と認識の発達

スピアマンは知能を一般因子と特殊因子の 2 因子で構成する（ ⑧ 2 因子説 ）を唱え、一方ギルフォードは「種類（内容・領域）」「所産（結果）」「操作（はたらき）」という 3 次元からなる立方体の（ ⑨立体構造モデル ）を提唱した。

ウェクスラーは知能を「目的的に行動し、合理的に思考し、効果的に環境を処理する、個人の（ ⑩総合的整体的能力 ）」と定義した。またビネーは知能観として「方向づけ」「適応能力（理解、構想）」「（ ⑪自己批判 ）」の 3 つの側面を持った心的能力をあげている。

ピアジェは前操作期（2 歳くらい～7 歳くらいまで）で（ ⑫対象の保存 ）を理解することができるようになると考えた。この時期には「表象」という資質を獲得し、目前に対象が存在しなくても心的スキーマを構成できるということである。